

2

蜆塚遺跡にみる定住

～小規模な集落～

史跡 蜆塚遺跡（浜松市）は三方原台地の南縁、佐鳴湖の東800mに位置する東海地方を代表する縄文時代後晩期の集落跡で、貝塚を持つ点に最大の特徴がある。県内で発見されている貝塚は、確かな数で蜆塚遺跡、西貝塚・石原貝塚・見性寺貝塚（磐田市）、大畑遺跡（袋井市）の5つであるが、蜆塚遺跡が最も良好である。

1 蜆塚に住んでいた人々

蜆塚の貝塚の存在は、すでに江戸時代には知られていた。〈史料1〉と〈史料2〉は、江戸時代に書かれた記事である。

この地に集落が営まれた理由は当時の自然環境による。蜆塚遺跡の背後には狩猟の場としての三方原が広がり、生い茂る森林は木の実を採集する格好な場所でもあった。遺跡からは骨盤に石鏃が突き刺さり、これを骨が増殖して包み込もうとしている鹿の骨が出土している。これは、鹿の後方から矢を放ったものの取り逃がしたことを物語っており、狩猟の実態を如実に示す資料である。さらに遺跡が形成される頃は、海面は現在よりも高く遺跡の近く

まで海の侵入があり、入江状になっていたと考えられる。また、三方原南側の海岸平野も当時はなく、台地末端まで海が迫っていた。つまり、山の幸とともに海の幸も得やすい場所に遺跡は立地している。こうした海進期は遺跡が形成される頃をもって終り、その後縄文後期・晩期にかけては海退期となって海岸線は遠ざかり、入江は淡水化が進んだ。そのため、漁労の面では淡水産魚貝類、特にシジミを主とする淡水性貝類への依存を高めた。しかし、貝塚に残された食料だけでは、いつも十分な熱量やたんぱく質を摂取できない状態であり、主食は木の実等の植物性食料であったと考えられる。

2 蜆塚遺跡の住居跡

蜆塚遺跡の発掘調査では約30基の住居跡が検出された。しかし、住居跡は重複しているものが多く、同時期に営まれた住居は4基ぐらいと推定され、集落の人口は20人程度であったと考えられている。食料の獲得法が多様化し、定住的な生活が可能になったといっても、静岡県の縄文時代は大規模な集落ではなく、また多くの労働力を必要とする生産活動は行われていなかった。

〈参考文献〉

浜松市教育委員会『蜆塚遺跡 総括編』
 芝川町教育委員会『大鹿窪遺跡 窪B遺跡』
 文化庁プレス発表資料「史跡等の指定について」

〔史料1〕 杉浦国頭『曳駒拾遺』
 蜆塚は、三つ山の東にあり、今は一村となりて、しつか家々も十あまり見へぬ、此所むかしいかなる所なりけん、土を穿ち見れば底の底までも猶蜆殻の尽くすることを知らず、かかることは、世にも又有ものかは

〔史料2〕 竹村広隆『変化抄』
 当村新田蜆塚村は、蜆殻の大なる塚これある故の名に候ところ、〔中略〕何程掘候ても殻ばかりに候、蜆殻と申ながらもよほど大なるもこれあり、誠に奇異なる事に候〔後略〕

〔浜松市史〕 史料編四 402頁
 〔浜松市史〕 史料編四 72頁